

令和3年度
第1回市政モニターリング
「富田林市わがまちパートナー」アンケート調査報告書

令和3年8月
高齢介護課作成

◆調査概要◆

1 目的

認知症になつても希望をもつて日常生活を送ることのできる社会をめざし、「認知症」に関する理解、想い、イメージや理想とするまち等について把握すること

2 調査対象

市政モニター制度「富田林市わがまちパートナー※」

※住民基本台帳から無作為抽出した18歳以上の市民で登録を希望された人

3 調査方法

自計式（調査対象者に調査票を送付し無記名にて回収）

4 調査期間

令和3年7月21日（水）発送～令和3年8月13日（金）〆切

（最終回答8月23日（月）受理分）

5 回答数、回答率

調査票送付者数 87名

回答数 77名 回答率 88.5%

6 回答者の状況について (n=77)

- ◆回答者の年齢は、40代が27.3%と最も多く、最も少ない10代で2.6%
- ◆60代以上は35.1%
- ◆男性が45.5%、女性が53.2%で大きな差異は見られなかった
- ◆家族の人数は、二人暮らしが35.1%で最も多く、次いで5人家族の20.8%
- ◆65歳以上の人との同居の割合は、同居している人が35.1%

7 認知症のイメージについて (n=77)

- ◆認知症になりたくないと思っている人は89.6%（69人）
- ◆認知症はだれでもなる可能性があると思っている人は83.1%（64人）
- ◆認知症への「不安」「何もわからなくなる」「こわさ」と感じている人は合わせて58.4%（45人※）あった。
- ◆「年をとるとなる病気だと思う」「なつても仕方がない」がそれぞれ22.0%（17人）

※「不安が大きい」「何もわからなくなる」「こわい病気」に重複回答した場合、1件として集計。

8 認知症の人と接した経験について (n=77)

- ◆仕事やボランティアで接した人が最も多く 29.9% (23人)
- ◆家族など身近な人の介護をした経験がある人が 27.2% (21人)
- ◆認知症の人と接した経験がない人も、 28.6% (22人) いる。

9 自分や家族が「認知症かな?」と思ったら (n=77)

- ◆家族や親せきに相談するが 67.5% (52人) ともっと多く、
次いで、かかりつけ医に相談が 62.3% (48人)
- ◆本やインターネットで調べるも 55.8% (43人) あった。
- ◆相談する相手として最も少なかったのが「友人」で 19.5% (15人)

10 自分が認知症になったらどうしたいか? (n=77)

- ◆これまでどおり家族と一緒にすごしたい 70.1% (54人) 次いで、
今までの仕事や趣味などを続けたい 53.2% (41人)、友人や近所の人とのつ
きあいを続けたい 42.9% (33人)
- ◆家族に介護をしてもらいたいが 20.8% (16人)
- ◆誰にも知られたくないは 5.2% (4人) だった。

11 まわりに認知症の人がいた場合にできること (n=77)

- ◆会った時に挨拶をする 88.3% (68人)、話し相手になる 68.8% (53
人)、災害時などに避難を手伝う 48.1% (37人) である。
- ◆何か力になりたいがどうしていいのかわからない 27.2% (21人)
- ◆「自分にできることはない」「関わりたくない」とその他を合わせると 3.9%
(3人※) であった。

※「自分にできることはない」「関わりたくない」「その他」に重複回答した場合、
1件として集計。

12 認知症の情報を何から得ているか (n=77)

- ◆テレビ、ラジオなどのマスコミが 51.9% (40人) 次いで、家族・友人・知
人などからの話が 48.1% (37人)、インターネット 45.5% (35人)
- ◆情報を得る方法がわからない、情報を得ていないは合わせて 6.5% (5人※)

※「情報を得る方法がわからない」「情報を得ていない」に重複回答した場合、
1件として集計。

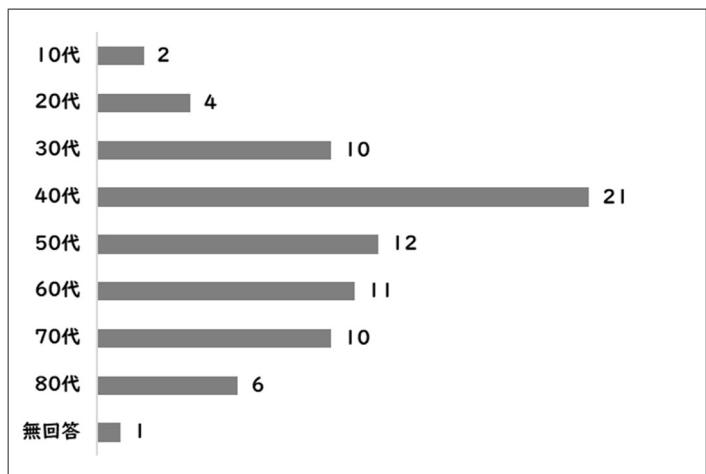
13 認知症になっても安心して暮らせる地域とは (n=77)

- ◆公的サービスや支援制度が充実している地域が 74.0% (57人)
- ◆認知症についての正しい知識が普及されている地域 54.5% (42人)
- ◆認知症について気軽に相談できる地域 45.5% (35人)

◆調査結果◆

I - ア あなたの年齢

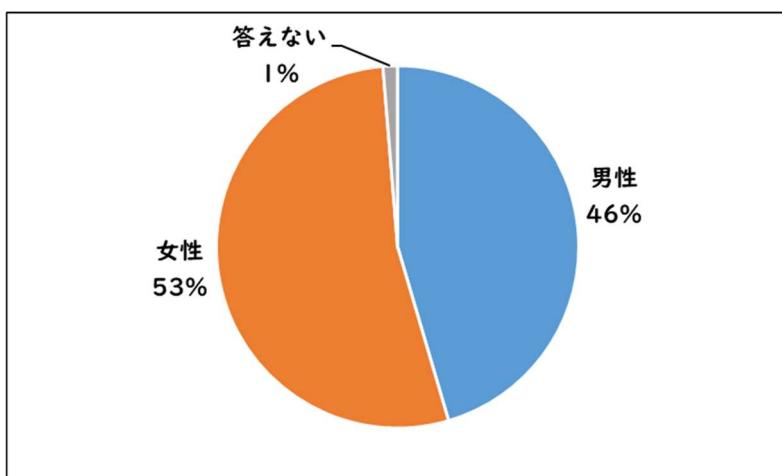
選択項目	人数	構成比
10代	2	2.6%
20代	4	5.2%
30代	10	13.0%
40代	21	27.3%
50代	12	15.6%
60代	11	14.3%
70代	10	13.0%
80代	6	7.8%
無回答	1	1.3%
合計	77	100.0%



40代が27.3%、次いで50代が15.6%、60代が14.3%と続く。

I - イ あなたの性別

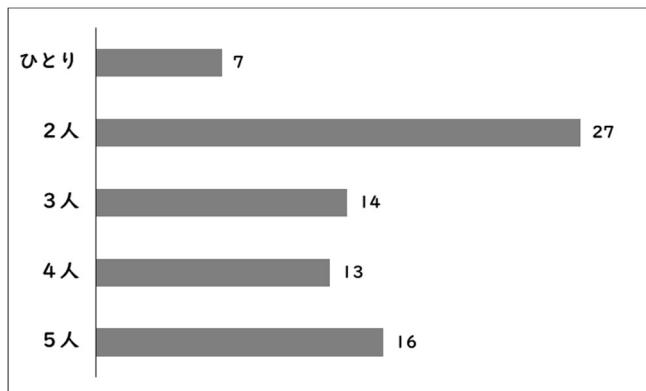
選択項目	人数	構成比
男性	35	45.5%
女性	41	53.2%
答えない	1	1.3%
無回答	0	0.0%
合計	77	100.0%



「男性」が35人で45.5%、「女性」が41人で53.2%

I - ウ あなたを含めて何人家族ですか

選択項目	人数	構成比
ひとり	7	9.1%
2人	27	35.1%
3人	14	18.2%
4人	13	16.9%
5人	16	20.8%
6人以上	0	0.0%
無回答	0	0.0%
合計	77	100.0%



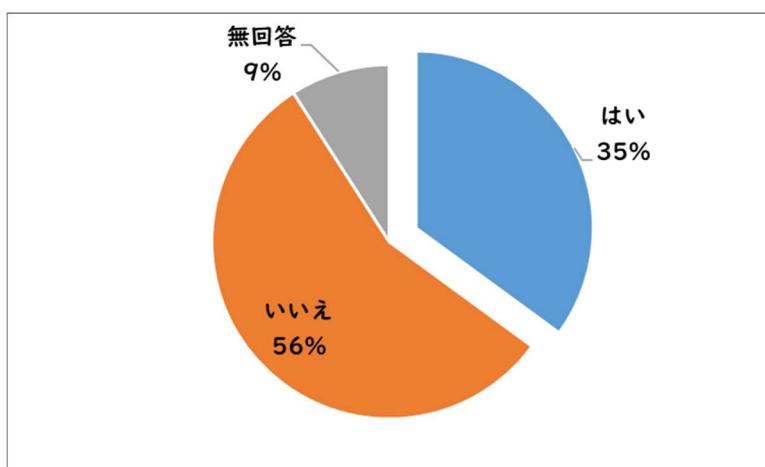
「2人」住まいが35.1%、次いで「5人」の20.8%となっている。

I - エ あなたは65歳以上の人と一緒に住んでいますか。

(1 - ウで2~6と回答した人)

選択項目	人数	構成比
はい	27	35.1%
いいえ	43	55.8%
無回答	7	9.1%
合計	77	100.0%

無回答は、1-ウで「ひとり暮らし」と回答した人



「65歳以上の人と一緒に住んでいる人」は27人で35.1%、「65歳以上の人と一緒に住んでいない人」は50人で64.9%。

4割弱の世帯で65歳以上の人と一緒に住んでいる状況である。

「年齢」との関連

選択項目	総計	10~20代	30代	40代	50代	60代	70代	80代	無回答
はい	27	1	3	3	3	6	7	4	0
	100%	4%	11%	11%	11%	22%	26%	15%	0%
いいえ	43	4	6	18	9	4	0	1	1
	100%	9%	14%	42%	21%	9%	0%	2%	2%
無回答	7	1	1	0	0	1	3	1	0
	100%	14%	14%	0%	0%	14%	43%	14%	0%
合計	77	6	10	21	12	11	10	6	1
	100%	8%	13%	27%	16%	14%	13%	8%	1%

65歳以上の同居者がいる「年齢」との関連は、70代が26%、次いで60代、80代となっている。反対に、65歳以上の同居者がいないのは、40代が最も多く42%、次いで50代30代である。

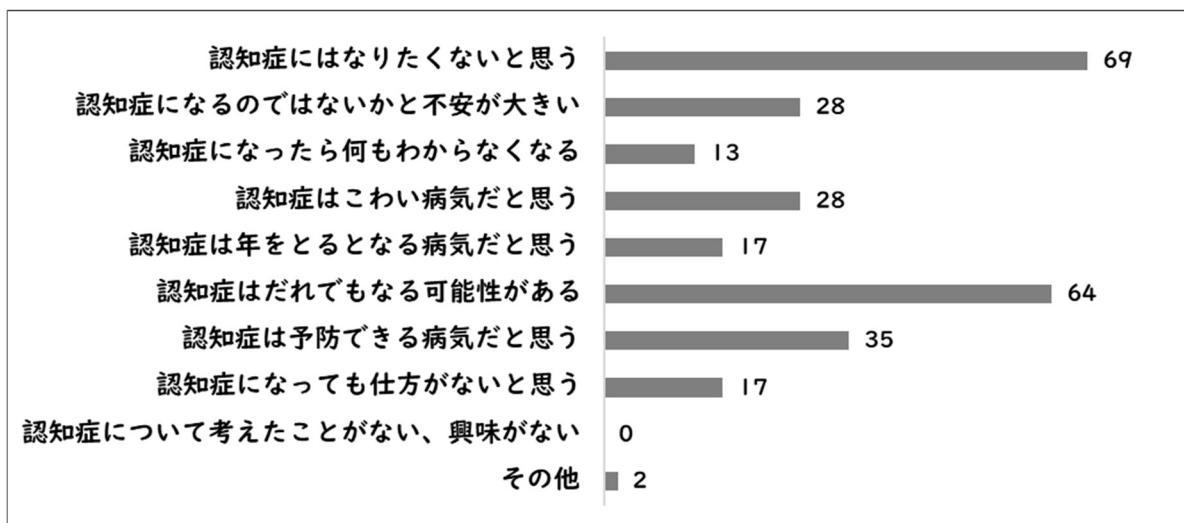
「年齢」「世帯人数」との関連

世帯人数	総計	10代	20代	30代	40代	50代	60代	70代	80代	無回答
2人	19	0	0	1	2	1	6	5	4	0
3人	3	0	0	1	0	1	0	1	0	0
4人	1	0	0	0	1	0	0	0	0	0
5人	4	1	0	1	0	1	0	1	0	0
合計	27	1	0	3	3	3	6	7	4	0

65歳以上の人と同居している27人について、年齢と世帯人数でみると、60歳以上の2人家族（高齢者の二人暮らし）で55.5%（15人）を占める。

2 認知症についてどんなイメージがありますか（あてはまるものすべて選択）

(あてはまるものすべて選択)



(n = 77)

「認知症にはなりたくない」と思っている人が 89.6% (69人) である一方で、「だれでもなる可能性がある」と思っている人が 83.1% (64人) だった。認知症に対する「不安」や「何もわからなくなる」、「こわさ」などネガティブな回答は 58.4% (45人※) あった。予防について「できる」の回答が 45.5% (35人) と半数以下となつた。

※「不安が大きい」「何もわからなくなる」「こわい病気」に重複回答した場合も 1 件として集計。

問2 「その他」の記載内容

○ 加齢による認知機能低下と病的な認知症の区別見極めが難しい。

※④（認知症は怖い病気だと思う）について、わからないので火の始末ができなくなり家事を起こすとか、刃物の間違った使い方、池や川に入っていくなどその他危険な事になれば怖い病気だと言えると思う。

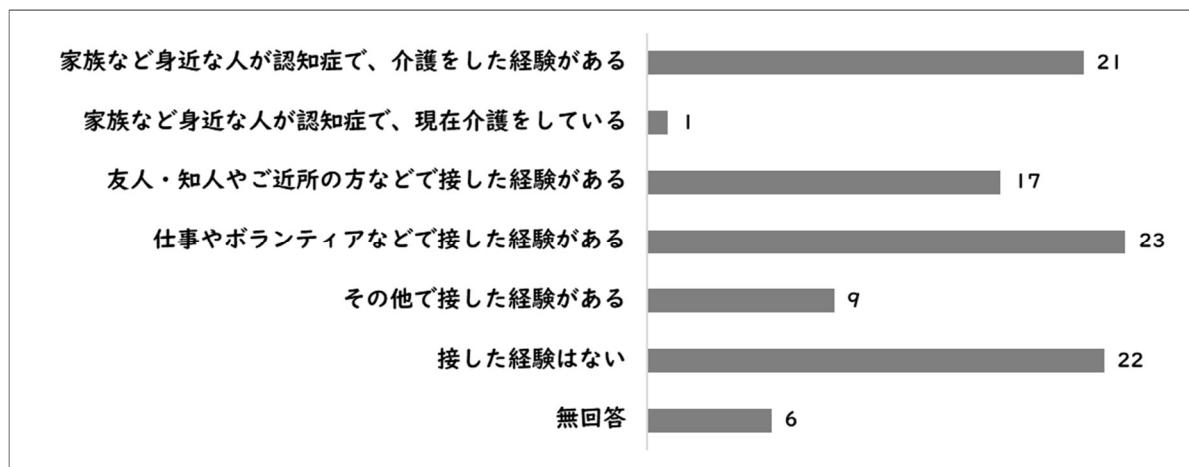
(80代、女性)

○ もし自分がなつたら周囲に迷惑がかかる

(60代、女性)

3 あなたは、今までに認知症の人と接した経験がありますか

(あてはまるものすべて選択)



(n = 77)

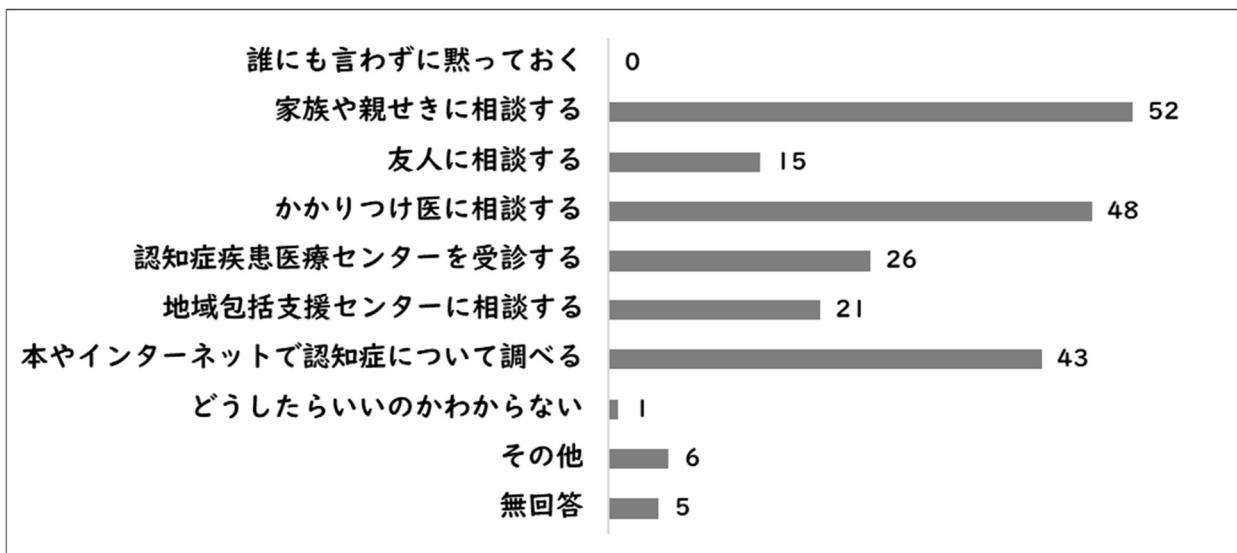
「仕事やボランティアなどで接した経験がある」人が 29.9% (23人)、次いで「家族など身近な人が認知症で介護経験のある」人が 27.3% (21人) となっている。28.6% (22人) が認知症の人と接した経験がないという結果となった。

問3 「その他」の記載内容

- 郷里の親 (80代、男性)
- 親族が認知症で (50代、女性)
- 遠方在住の親族 (70代、女性)
- 通っているデイケアサービスで接する事がある (80代、女性)
- 実家の両親が認知症だが介護経験はない (50代、女性)
- 現在病院で介護の仕事をしている。 (30代、女性)
- 介護はしていないが身近な人が認知症だった (40代、男性)
- 入所中の施設から徘徊で出て来た人を徒歩で15分、見当をつけて送っていった事がある。 (80代、女性)
- 義母 (60代、男性)

4 自分や家族が「認知症かな？」と思ったらどうしますか

(あてはまるものすべて選択)



(n = 77)

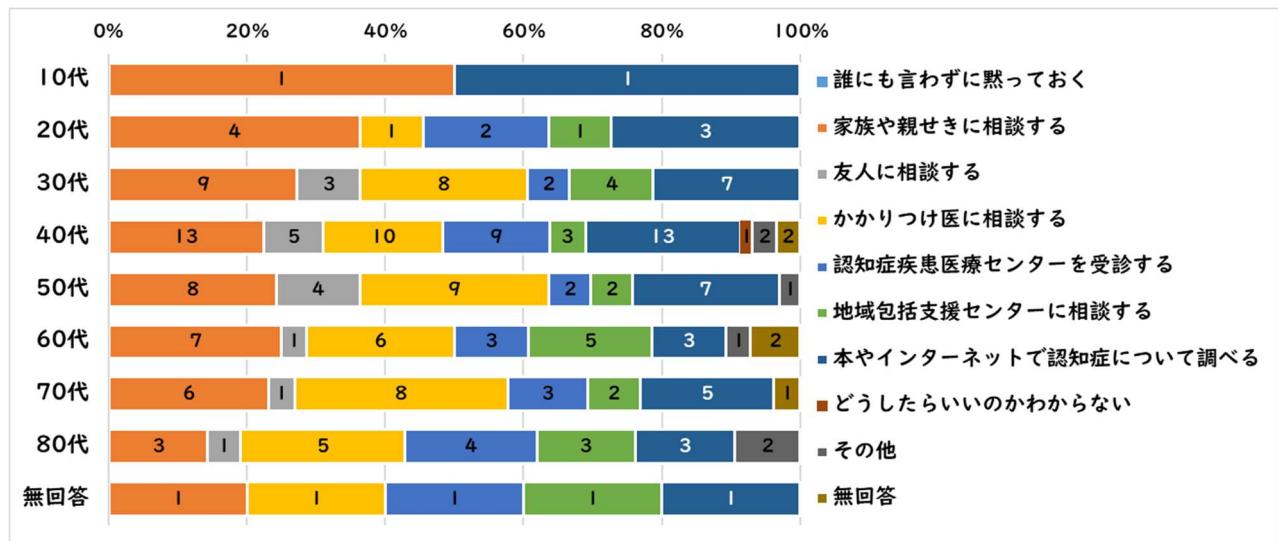
相談先として多かったのは「家族や親せき」 67.5% (52人)、次いで「かかりつけ医」 62.3% (48人) である。「本やインターネットで調べる」と回答した人も 55.8% (43人) と多い。「どうしたらしいのかわからない」が 1.3% (1人)、「誰にも言わずに黙っておく」を選択した人はいなかった。

相談先への信頼性や情報の正確性を求める回答が多いことがわかる一方で、認知症疾患医療センターに相談するが 33.8% (26人)、地域包括支援センターが 27.3% (21人) であった。

問4 「その他」の記載内容

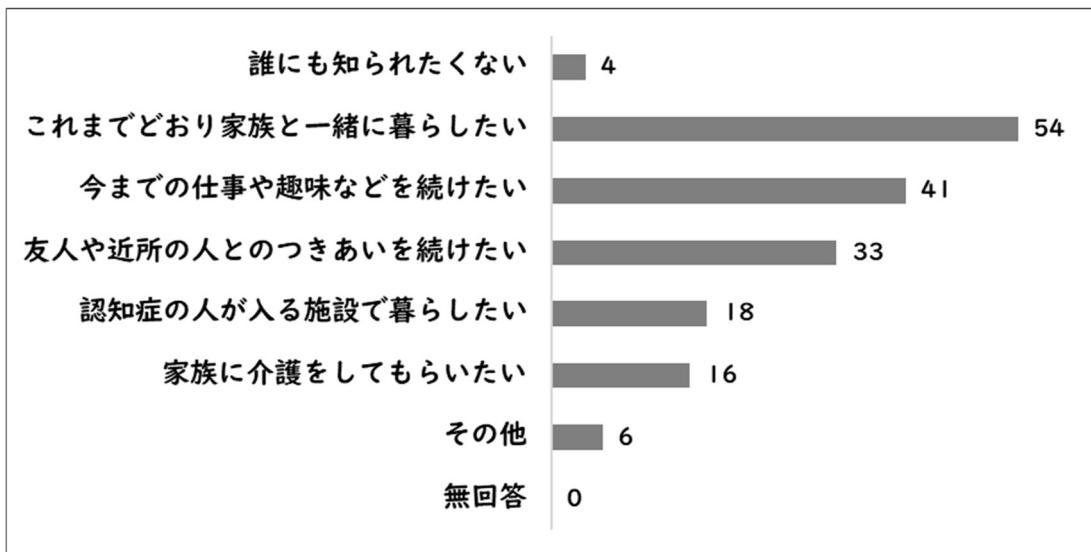
- 成年後見申し立てを検討する (40代、男性)
- なる前に介護・福祉系資格を取得する。知識を吸収しておく。 (60代、男性)
- 本人に言う (40代、女性)
- 出来るだけ寄り添い話相手になる (80代、女性)
- 両親の変化を相談するのは一緒に暮らしてくれている私の弟ですが、おせっかいにならないよう余り意見は言えない (50代、女性)
- 余程危険なことや困難がない限り家庭で1日でも長く生活できるようにする手立てを講じたい (80代、女性)

「年齢」との関連



年齢との関連については、若年ほど「家族や親せきに相談する」が多く、反対に高齢になるほど、「かかりつけ医に相談する」の割合が多くなっている。「地域包括支援センターに相談する」は高齢になるほど割合が高い。「本やインターネットで調べる」の割合は年代で（10代を除く）大きな差異は見られなかった。

5 もしあなたが認知症になつたらどうしたい（どうしてもらいたい）ですか
 (あてはまるものすべて選択)



(n = 77)

「これまでどおり家族と一緒に暮らしたい」 70.1% (54人) や「今までの仕事や趣味などを」 53.2% (41人) 「友人や近所の人とのつきあいを続けたい」 42.9%

(33人) など今までの生活を続けたいと感じている人が多い。

「これまでどおり家族と一緒に暮らしたい」と回答した人には、「家族に負担がかからない程度までなら」 (30代、男性) (30代、女性) と条件付きの人もいた。

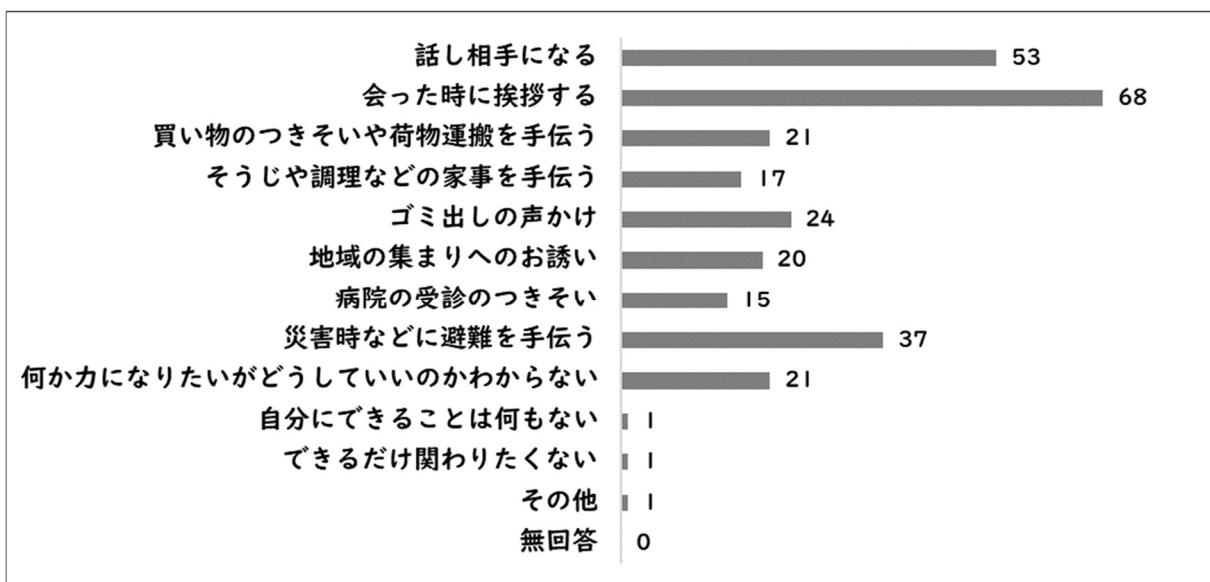
「誰にも知られたくない」は5.2% (4人) と少數であった。

家族に介護をしてもらいたいと考える人は、20.8% (16人) と家族の介護を望む人は2割であった。

問5 「その他」の記載内容

- 通所型デイサービスを利用したい (30代、女性)
- 家族にみてもらいながら介護のプロにもサポートをお願いしたい。 (40代、女性)
- 何でも話し合える友達を作つておく (80代、女性)
- 家族に負担がかからない程度までなら (30代、女性)
- ② (これまでどおり家族といっしょに暮らしたい) だが家族が望むなら施設に入つても構わない。 (40代、男性)
- 程度によるが手に負えなくなれば家族に負担がかからないよう施設にお世話になるなり家族に任せたい (80代、女性)

6 もしまわりに認知症の人がいたら、あなたはどんなことができると思いますか
(あてはまるものすべて選択)



(n=77)

「会った時に挨拶する」 88.3% (68人) が最も多く、次いで「話し相手になる」 (68.8% (53人) と身近で出来る支援の割合が大きい。「何か力になりたいがどうしていいのかわからない」 27.3% (21人) と何らかの形で認知症の人との関りが持てると考えている人が 3割弱。

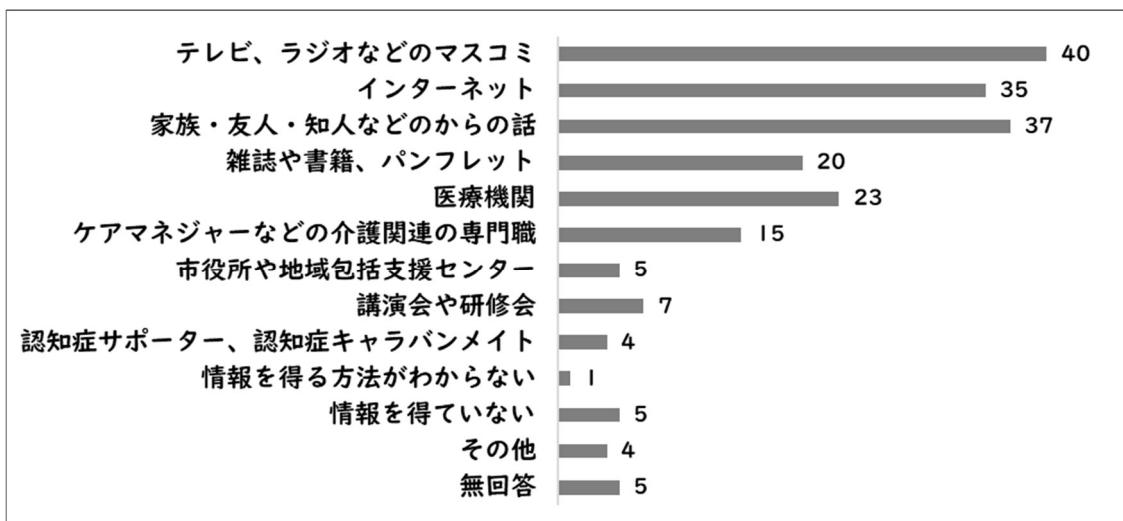
問6 「その他」の記載内容

- 家族の方から何か手伝ってほしいと言われたら出来る範囲で手伝いたい。自分の年齢を考えると残念ながらやりたくてもやれないことが多くなってきてる。

(80代、女性)

7 認知症についての情報を何から得ていますか

(あてはまるものすべて選択)



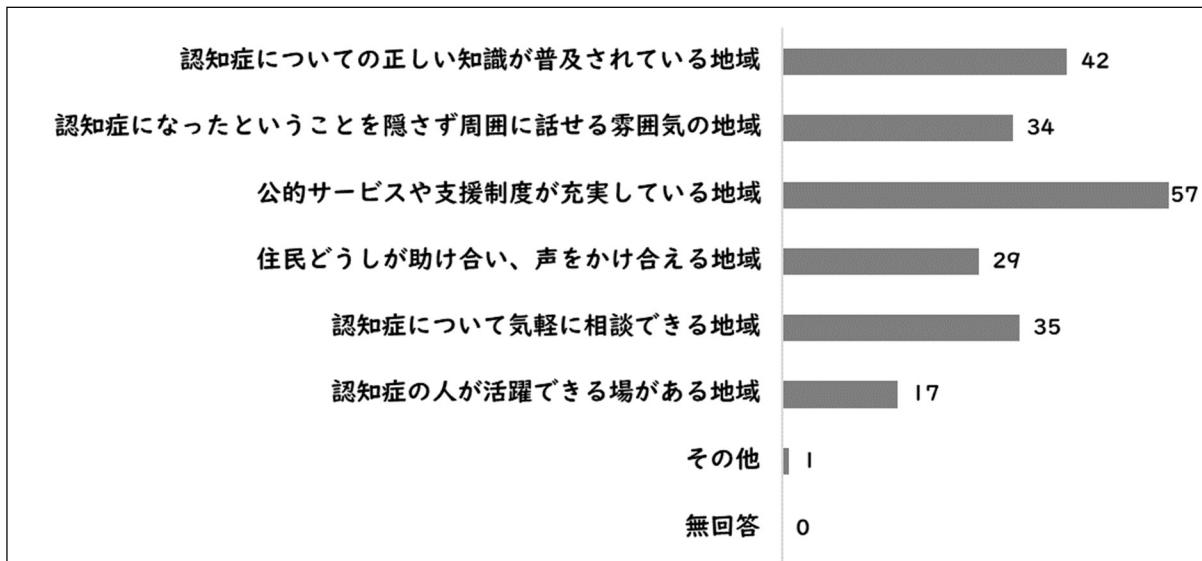
(n=77)

「テレビ、ラジオなどのマスコミ」は 51.9% (40人)、「家族・友人・知人などからの話」 48.1 (37人) と続く。一方で「情報を得る方法がわからない」 1.3% (1人) 「情報を得ていない」 6.5% (5人) と回答した人もいた。「4 自分や家族が「認知症かな?」と思ったらどうしますか」では、「自分や家族のことを友人に相談する」は 19.5% (15人) と少數であったが、「家族・友人・知人」から情報を得ている人は多い。

問7 「その他」の記載内容

- 放送大学の授業科目 (60代、男性)
- 自分自身が介護の仕事をしているので常に認知症については新聞や職場など色々なところで情報を得るようにしている (40代、女性)
- 必要になれば、④(雑誌、書籍、パンフレット) ⑥(ケアマネジャーなどの専門職) ⑦(市役所、地域包括支援センター) ⑧(講演会、研修会)に情報を求める (80代、女性)
- 共同研究者からの情報 (40代、女性)

**8 あなたや家族が認知症になっても安心して暮らせる地域とはどんな地域ですか
(上位3つを選択)**



(n=77)

「公的サービスや支援制度が充実している地域」が 74.0% (57人)、次いで「認知症についての正しい知識が普及されている地域」が 54.5% (42人) であった。 「周囲に話せる雰囲気の地域」 44.2% (34人) 「住民どうしが助け合い、声をかけ合える地域」 37.7% (29人)、「気軽に相談できる地域」 45.5% (35人) も一定割合の回答がみられた。

問8 「その他」の記載内容

- 子供の時から、家族、学校、社会で優しさや思いやりの心を育てる方針を一致して貫くことにより人が人を大切に出来る地域、社会、国が築かれると思う。問い合わせにある「安心して暮らせる地域とは」そのような地域だと思う。(80代、女性)

9 「認知症との共生に向けて」というテーマについてのご意見（自由記載）

選択項目	人数	構成比
記述有り	42	54.5%
無回答	35	45.5%
合計	77	100.0%

問9の記載内容

- 認知症と共生するためにはまず認知症についてよく知り偏見をなくすことだと考えます。数年前に認知症サポーターの講習を受けましたがそれっきりになっています。継続した勉強の機会が必要と考えます。 (40代、男性)
- 仕事で以前、認知症の方と接する機会が多くありました。認知症の病気自体の理解を広める事は難しいかもしませんが認知症の方が日常生活のどのような場面でお困りになるか不安になるのかを知つていただくことで助け合いが広がるのではと思います。 (20代、女性)
- 認知症といつても人それぞれあり、少しの認知なら家族と一緒に過ごせるが自分が人間かどうかわからなくなる人もいる。症状に合ったサービスがあればよいと思う。 (70代、女性)
- 家族が認知症で介護され苦労され社会から孤立し悲しい事件が起きないようなシステム作りが必要だと思います。 (50代、女性)
- 認知症は精神疾患の一つの病です。「共生に向けて」には自治体や公共施設で働く人の理解がなければなりません。特に本市の生涯学習部の職員には「合理的配慮」という言葉も知らない職員（中央公民館長と女性）が居ます。全職員に『合理的配慮対話を聞く対話が拓く』（有斐閣）を購入し精読してください。 (60代、男性)
- 高齢化が進みどうしても認知症の方が多くなってしまいます。富田林市の認知症サポート養成のキャラバンメイトの講座も受けました。認知症を知ることで偏見なく支え合う事ができると思いました。ただ、まだ仕事の都合などでキャラバンメイトの活動には参加できていませんが、認知症をもっと身近に感じて大変な人達がもつと老後を安心して過ごせる地域になればと思います。 (60代、女性)
- 症状にもよると思いますが非常に共生というのは難しい話だと思います。認知症初期の段階であるならば受け入れてくれる施設も少ないですし、公的サービスが充実しているとありがたいと思います。 (40代、女性)

- 今回のアンケートは娘と一緒に考えました。共生の第1歩は意識付けから入るのだと思えました。 (40代、女性)
- 「認知症」は本人は一般的な病気と違って病気になっていると言う認識がないと思う。それから年齢もバラバラだし急にガクンとなる人と徐々に進む人とか掴みどころがない。できれば進むのを遅らせたい。それにはどの様な薬がよいのか、どの様な食物、どの様な生活がよいのかが知りたい。 (80代、男性)
- ありきたりですが、もっと本人でも躊躇する事無く気軽に相談でき支援制度も充実し、地域参加が出来る世の中になればと思います。 (50代、女性)
- 認知症についてほとんど理解していない人も多いのではまずは知識を学べる環境があるといいです。 (40代、女性)
- 自分自身が50代になり、認知症についてこのように考えられる機会を得て一番心配なのは家族に迷惑がかかるのではないか?ということです。他の病気なら将来について話しあいができるかもしれませんが認知症にかかって、自分の事すらわからない状態では時すでに遅し・・・となりかねません。そこが心配ですね。 (50代、女性)
- 誰がどうだろうが互いに理解するべきだと思います。 (20代、男性)
- 現在私は通所型デイサービスにて認知症の方と接する事がが多いのですが普段からデイサービスのみではなくお家にいる時や地域でも予防、進行をおくらせる事は可能なのではと感じております。脳トレなどもっと多くの場所で行える環境作りが大事、必要ではないかと思います。 (30代、女性)
- 認知症の方の居場所を作ってもらいたい。私がなった時どこに相談してどこで心安らげるか、そういう場所が欲しい。金銭面でも援助してもらいたい。 (40代、女性)
- 誰もがなる可能性のある認知症は、周囲の理解も必要で孤立しないよう地域と共生できればいいと思います。 (40代、女性)
- 明日は我が身という思いで回答しました。 (70代、女性)
- 認知症を発症しても家族の負担が少なくて済むような施設の充実した社会 (70代、男性)
- 治療できる将来に期待します。 (50代、男性)

- 自分の家族が認知症になっても家族だけが介護を担うのではなく地域で支え合えるようなところになれば認知症になる不安も減らせると思う。認知症になっても、まだまだ出来ることもある人はぜひ働ける場所を作つて活躍してほしい。認知症の人を介護する家族のサポート（精神的に負担を軽減できるなど）もできるシステムも増やして欲しい。私は親が認知症になっても施設に入れようとは思ってません。できるだけ自宅でずっと生活して欲しいと思ってます。 (40代、女性)
- 認知症への周りの理解が必要と思われるがオープンにすることにより騙されたりする事もあると思うので難しいこともあると思うのです。 (40代、女性)
- 身内だけだといつか破綻すると思うのであえて他人が入ることで継続したフォローができると思う。人的サービスや一時入所など気軽に（手続きを含め）利用できると良い (50代、女性)
- 認知症になった本人は何にも解からないので周囲がやはり気配りの出来る生活環境を作つてほしい。 (80代、女性)
- 認知症について気軽に相談できたらよい (30代、女性)
- 同じ目線で優しく接する態度 (80代、女性)
- こちらがボランティアをしたのに逆にボランティアをしてもらえるのか。ボランティアは見返りを求めてはダメなのか。声に出すとダメなのか。だれかが助けてくれると思ってボランティアを続けよう。 (70代、男性)
- いろんな環境の人たちが、金銭的に無理なくお願いできる。最後まで同じ場所で過ごせる施設を増やして家族の心の（体も）負担を減らしてあげて欲しい。3ヶ月ごとに次の施設を探すのはかなりキツイ。家庭も仕事もあるのに心病んでしまいそうになる。病んでいたと思う。 (40代、男性)
- 実際認知症の人に対してどのように接していいかわからないのは不安です。やっぱり自分の家族がなつてしまったらと思うと、もっと市からも情報をくださるとありがたいです。 (10代、男性)
- 認知症に対する医療、行政の対応についての情報の提供 (70代、男性)
- 個々それぞれ格差があるのでなかなかレベルを判断しづらい。定期的に進捗及びレベル、当該有無をチェックできる環境が必要だと思う。高齢の一人住まいでは無理がある。 (80代、女性)
- 地域住民どうしの日頃のコミュニケーションが大切 (60代、女性)

- 認知症への正しい知識とサービス支援制度の充実はとても大切だと思います。細やかな周りとのコミュニケーションを取り合うことも必要です。あと予防対策をすることも大切だと考えます。 (30代、女性)
- 厚生労働省老健局、ボランティアポイント制度導入されて自分も元気なうちにポイントを貯めることができたら少しは明るい老後をむかえる事ができそうです。 (50代、女性)
- 高齢化社会が進む現在、認知症は誰でもなり得るものだと言われています。認知症のある人を家族だけが介護するのではなく、地域住民皆で支え合い、さらには本人が活躍できる環境がもっとどの地域にも広がればと思います。 (30代、女性)
- 〈認知症にならないために心掛けていること〉
教育（今日行くところがある）教養（今日用事がある）→週単位でスケジュールを把握して趣味や地域活動に積極的に取り組む。出来るだけ人との交流を持つこと、家計簿、日記をつけること（字を書く）気持ちの切り替えを上手に実践すること。
☆ある程度予防できると信じています！ (70代、女性)
- 現実的に認知症は誰でもなる可能性があり、なってしまうと家族の負担が増えてしまう。また、軽度の認知症であれば今まで通りの環境で生活できなくもないと思うが、重度の場合、施設などの制限のある場所で生活していくほかないのが実情だと思います。認知症は具体的な予防策や対応を立てるのが難しいものだと思います。 (30代、男性)
- 明るく対話できるように、聞き役をしたり、言葉がけを工夫したりして、会話が続けられるように努力したい。特に男性は症状がわかりにくないので（女性と表現力が異なり表しにくいのか？）専門家の導きが必須だと思う。いずれにせよ尊い生命が幸せの中で全う出来ることを願わざにはおられない。 (80代、女性)
- 正しい知識と理解が必要だと思うので、市が中心になって認知症を知る機会を増やして欲しい（動画を自由に見ることができるよう配信したり、リーフレットを作って配るとか） (60代、女性)
- 認知症については、高齢化していく中で知識を持つ方は増えていると思います。ただ知識があっても、適切に接する、対応する余裕がなければ実践はできないのでサービス（住民主体・行政ともに）や支援（金銭面含む）が充実してほしいと思います。実際には、財源には限度もあるので、今親が認知症になってしまっても少しは知識のある自分でも適切に対応できる自信はないです。しばらくはそのように感じる社会が続くのではないかと思っています。 (40代、女性)

- 高齢者が増えていくにつれ、認知症は避けて通れない事柄であると思うので、公的サービスや支援制度の充実はもちろん皆で助け合い支えていくことが大切ではないかと考えます。 (40代、男性)
- 認知症の方と社会との関りについて専門家を含めて対応を協議すべき (50代、男性)
- 地域の理解と行政サービス (60代、男性)

